

OSF コーナー

大田区海洋少年団OSF会は、結団60周年の「しおり」Q&Aでご案内しました様に、当団の卒団者(OB)が中心となる後援団体で、同時に育英会の賛助会員でもあり、昭和57年に再編されてから足掛け31年になります。

現在は、団機構の一部として組織され、団長・副団長・役員・各指導者等の大半が、会員出身または会友でもある為、機会ある毎に団役員・リーダーとOBが、様々な活動方針と行動について、意見交換をして協力しています。

正会員は、原則的に卒団者の社会人で、年間一定額の会費を納入する事が必要ですが、特別の事情・地方への転勤などで、会の活動に参加できない場合には、会費を減額して育英会費だけを納めます。

また、会員の家族全員をはじめ、活動に共鳴される(非会員OB・団員家族)方々は、会友としてOSF会の行事に参加して、旅行・新年会など親睦を深めて戴きます。

【主な年間行事】

- ・ 1月 総会・新年会(会員・会友)の開催。
- ・ 5月～6月 1)団行事の親子体験教室に、カッター指導等の奉仕。
2)横浜港カッターレースへの出場(最大2チーム)別掲。
- ・ 11月 1)クリーンカッター(清掃)の奉仕。
2)秋季研修旅行(会員・会友)の開催。
- ・ 12月 訓練納め・餅つき大会の奉仕。

【その他の活動】

- ・ 周年事業の奉仕 結団50周年・60周年等、企画から運営までの全面的な奉仕。
- ・ 特別行事の協力 第51回全国大会(東京)で、13名が実行委員として参画。
- ・ 祝賀行事の開催 会員の慶事・受章・その他、祝賀会の開催。

【カッターレースの沿革】

平成12年OSF新年会の席で、内山常任幹事が出張先で得た情報に、出席者の大半が賛意を示した事が発端で、沼津市の「海人祭」に併せて開催される、第14回沼津港カッターレースに初参加したが、惜敗の悔しさをキッカケに、OSF会のメイン行事として定着、会場は横浜港に移りましたが、今日まで絶える事無く出場しています。

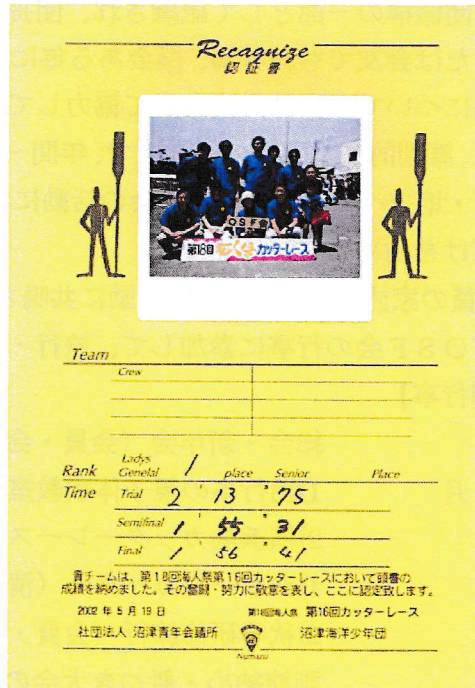
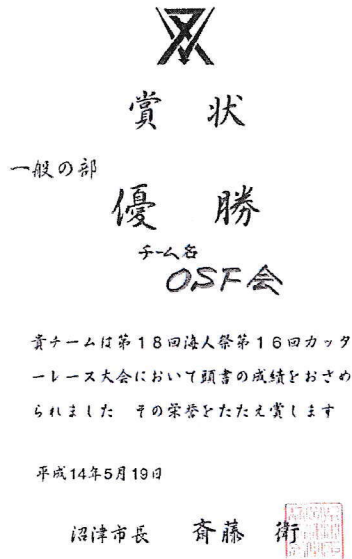
少年時代に体験した、カッターを漕ぐ事の身体的な辛さと、ゴールした瞬間の何とも言えない達成感が、鮮烈な思い出として浮かび上がり、体力の衰えを乗り越えて出場する事が、もはや癖と言うより生活の一部となっています。

毎年、5月から6月に掛けて開催される【親子体験教室】の奉仕活動も、この時期に実施されるカッターレースの、体力調整の前哨戦との位置を占めています。

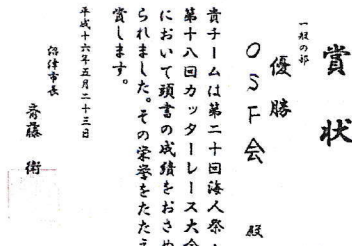
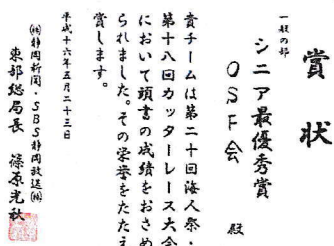
【カッターレースの戦績】

◎沼津港カッターレース（静岡の水産系、短大・高校の端艇部中心、第14～21回出場）

- 平成12年 瓢箪から駒の初出場、準決勝進出するも総合7位で惜敗。
- 平成13年 雪辱を期して、決勝進出も教官チームに惜敗し総合4位。
- 平成14年 順調に勝ち上がり、まさかの総合初優勝。盛大な祝勝会。



- 平成15年 連覇の夢むなしく僅差で準優勝の凱旋。この年結団50周年。
- 平成16年 予選から順調で、一般・シニア共に堂々の総合再優勝。



- 平成17年 そろそろ体力の衰えか、総合5位でもシニア連続優勝で帰還。
 - 平成18年 館山の遠征チーム来襲、総合3位でもシニア3連続優勝を獲得。
 - 平成19年 港工事で最後のレース、有終に花を添える決勝進出ならず。
- ☆沼津港・海人祭の華、カッターレース初参加から通算8戦して、総合優勝が2回
 その他、思い出を作る場を戴いた・主催者【沼津海洋少年団】に感謝し、今後とも
 益々の弥栄を祈念申し上げます。

◎全国大会・千葉港 オープン競技（全国大会初の試み）参加

平成19年 沼津の雪辱を期して参加も、高等級に惜敗。強風のせい？と納得。

◎横浜港カッターレース（出場チーム 一般の部 172チーム）

平成20年 初出場、豪雨の中の第1レース、先頭でゴールも予選で敗退。

平成21年 懲りずに出場、2分47秒27で先頭でゴールも予選敗退。

平成22年 抽選の結果、2チーム出場いずれも先頭ゴールならず。

平成23年 去年よりは何とか、2分44秒76、ウーン。

平成24年 なんと辛抱強い、新記録2分40秒16、予選通過あと少し。

平成25年 第30回記念・シニア賞、ついに第3位。石の上にも6年です。

この団結と忍耐が、第51回全国大会実行委員の原動力です。

・シニア3位のクルー（平均年齢 56.8才）



【カッター余話】

このカッターに纏わる、幾つかの余話をご紹介します。

かなり古い団員、当団で言えば第7期生（S.35入団）以前の会員は、汐留川（現在の首都高速1号線）に面した海上保安庁の水路部から、日本連盟のカッターに乗艇して、浜離宮の脇から東京港内の第3御台場まで、或いは日本橋川から隅田川に抜けるコースで訓練していましたが、それらの川底が東京オリンピックを契機に、首都高速道路に変身していますので、今のリーダー・団員諸君には想像もつかない事でしょう。

その後、第12回横浜全国大会（S.37）では、女子団員を交えた高等級で第3位に入賞し、その時の三渡艇長はそれ以前から、今年の横浜港レースのシニア3位入賞まで、ナント54年間も艇長であり続けた訳ですから、カッターレース出場に掛ける想いは、並大抵のもので無い事がご理解戴けると思います。

また、昭和37年度に配属された、FPR製新艇で特訓を受けた団員の多くは、現在でも還暦を過ぎた会員として、バリバリとOSF活動を続けて居ります。

願わくば、様々な事情で団・OB活動に参加されていない、元団員・リーダーなどの卒団者が馳せ参じてくれる事で、メンバーの若返りを図りたいものです。

【親睦活動の記録】

OSF会の結成から30年、この長い歴史に中でもカッターレース参戦を除いて、親睦活動としては新年会と秋季研修旅行がありますが、特に秋季旅行についてはJTB出身の内山隆雄常任幹事が、毎年の労を厭わず様々な趣向のもとに企画し、会員だけでなく会友の皆さんにも絶大な人気を誇っています。

- ・2005年 この年5月、沼津港カッターレース2度目のシニア優勝、11月の恒例の秋季旅行では漁業研修が催され、前夜から参加された石井名誉団長（OSF 顧問）他、名カメラマンながら船釣りビギナーのT会員等が大漁に恵まれ、宿泊先の名板前さんの手による豪華刺身盛りに変身、参加者全員で舌鼓という次第でした。
勿論、ベテラン釣り師の内山幹事と口自慢のM会長も、それなりの釣果でありました。

・メジマグロと石井顧問



・ビギナーズブラックの月村会員



・多少は疲れ気味ですが、解散前に勢揃いした会員たち。



帰京する列車内でも、次の集まり（餅つき）に向けて話が尽きなかったそうです。

【竹馬の友】

OSF会の歴史は、現在の形となって30年経過しましたが、OB会としての起源は更に遡ると、40数年前の榎本会長（3期生）時代を経ていますので、当然に高齢化が進む訳ですが、石井顧問・東叟会友・高橋会友を除き、会長以下の正会員では既に9名が、還暦ポイントを通過していますので、会員の若返りも急務なのですが、仲間意識の強いメンバーがその都度、【還暦祝いの会】を催してくれますので、会員の絆は益々固く結ばれます。

・会員のお嬢さん達に60本のバラと、釣りグッズを贈られ大満足の三渡会長。(2004年)



・この年は沼津カッターレースで、総合優勝・シニア優勝のダブル受賞祝賀会も。



この2年後には、安藤日出男会員（現団長）が還暦を迎え、前回と同じ東京港が眺められる、浜松町・弥生会館に於いてご令室もお招きし、盛大なお祝いの会となりました。

例によって、会員の抜群のアイデアに依る、縁起の良い【真紅の贈り物】などが手渡され、秋の研修旅行会場で披露されましたが、適当な画像が無い為に掲載できません。

明けて、翌2007年には安藤和正・高橋守の両会員が還暦を迎え、市ヶ谷・私学会館に於いてお祝いの会が開催され、その後2009年には安間会員が還暦を迎えましたが、日程上の都合に依り、秋季研修旅行の席上でお祝いを致しました。

・お祝いの会員が勢ぞろい。



・何故か、恒例となった表彰状。



・愛娘と一緒に高橋会員。



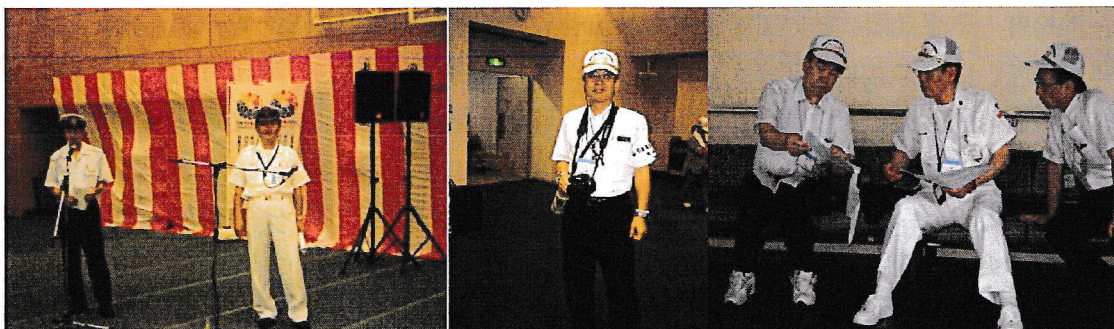
・何やら言い訳する安藤会員。



第51回全国大会で実行委員として、暑い中を一生懸命奔走した直後の2013年8月末、安倍・内山・大井・3名の会員が揃って還暦を迎え、懐かしい会場・弥生会館の同じ部屋で、還暦のお祝いが開催されました。

いつも、OSF会の特別行事では裏方を務め、秋季研修旅行をはじめとして、会員の結婚・旅行・切符の予約等々、20年以上の長い間に、彼の世話にならない会員がない程、何かと面倒を見た内山会員も、盛大な祝福を受け感慨深いものがあったようです。

・全国大会で司会役の内山会員。写真記録の安倍会員。協議中の大井会員（左端）



【結団 60 周年】

第 51 回全国大会の支援活動から間もなく、僅か 2 か月後に開催された【結団 60 周年】記念行事では、式典から祝賀会全般受付並びに、進行から接待・撮影等々に亘って、団執行部及び父母会の皆さんと共に、栄えある行事を成功裏に遂行できた事は、私達を育ててくれた大田区海洋少年団への、お返しのたった一つであると考えています。

・ 祝賀会を前に、佐藤音楽隊長を囲む会員たち、額の輝きが年輪を感じさせます。



・ 祝賀会場の女性会員。

・ 今年は、何十回も会うね～。



【比べてみると】

平成 15 年 10 月 19 日、結団 50 周年で OSF 会と父母会の皆さん。(2003 年)
何と言っても 10 年ひと昔ですから、若さと馬力が違いますね。



・三人組は健啖家。

・名司会者のお二人。



この、結団 50 周年記念行事は団の決定として、企画の段階から全て OSF 会が立案、父母会の皆さんからの応援を得て進行したものです。

会場となった、穴守稲荷神社のご協力に依りまして、祝賀会のお料理以外は全て手作りで実施致しました。

祝賀会のご挨拶

OSF会長 三渡 祥晃

本日は、ご多用の中、大田区海洋少年団の結団60周年並びに、音楽隊創設30周年行事の為に、たくさんの皆様にお集まり戴きまして、厚く御礼申し上げます。

私事でございますが、1955年・小学校5年生の春に入団を致しまして、足掛け60年に届こうかと言う年数をお世話になりまして、海洋少年団は私から切り離すことの出来ない身体の一部であり、OSFの仲間たちは兄弟同様の間柄でございます。

いささか下世話な言い方ですが、所謂【海洋バカ】とこの世界で申しますが、OSF会という会は、まさにその【海洋バカ】の集まりでして、本日はブルーのOSFジャンパーを着用しているのが会員の一部ですが、先程ご挨拶申し上げました安藤団長ほか、リーダーも全て私どもの会員でありまして、皆さまにお配りした【しおり】の中に、紹介させて戴いて居りますが、全員が過去に指導者・リーダーとして、夫々の時代を担ってきたメンバーであります。

実は、この【何とかバカ】は日本中に散らばって居りまして、全国大会ともなりますと各地から集まってきますが、皆さん40年・50年の猛者ばかりで、本日もその一部の方々が来賓として、この会場にお見えになっていらっしゃいます。

また、この8月には33年振り、東京に於いて全国大会が開催されましたが、父母会長とOSF正会員の13名が、実行委員として手を挙げて下さり、東京に集まった各地の団員達のお手伝いに、汗を流して戴いた次第です。

ところが、正会員平均年齢が58才に達し、ご多分に漏れず、この世界も団員とOBの、少子高齢化が進み憂慮しております。

大田区団があつてのOSF会であるのは当然ですが、訓練等の応援もさる事ながら、全会員が育英会員としての分担もでございます。

過去のある時期、地方に幾つかの巨大団が誕生し、【路地裏海洋少年団】などと揶揄され事もありましたが、大田区団が60年の長きに亘って、連綿と脈打ってきましたのも、当団がオーナー少年団では無く、官製の少年団でもなかった為に、事あるごとに育英会或いは父母会と言う、力強い株主に支えられてきたからでありますので、団長共々お預かりした子供たちを、指導者にありがちな上から目線ではなく、団員の目の高さでジックリと育んで、将来のリーダーに導く仕事も残っています。これからも変わりなく、皆様のご支援を賜ります様、お願い申し上げます。

さて、2020年に東京オリンピックが開催される事になりましたが、1964年の東京オリンピックの際には、それを記念して世界各国から青少年を招へいし、世界青少年キャンプが

開催されましたが、リーダーであった私は大田区の推薦により、東京都代表7名の一員として、世界青少年キャンプに参加する機会を得ましたが、大田区に於いては故・小林初代団長並びに佐藤音楽隊長が、心血を注いで築き上げた海洋少年団に、評価を与えて戴いた結果と自負しておりました。

その参加者の中に海洋少年団員があと1名と、僅かだったのは残念でしたが、その4年後にメキシコで青少年キャンプが開催され、日本連盟から安藤日出男氏（現団長）が派遣された事で、世界レベルで青少年交流の認識が広まって、安藤和正会員も青少年交流協会から、ドイツ（当時・西独）へ派遣されております。

次の東京オリンピックに於いて、どの様な展開が待っているか解りませんが、海洋少年団の存在感を高める為にも、これからは私どもが何を為すべきか、皆さんとグラスを傾けながら、考えてみたいと存じます。

本日は、ご多忙にも拘わらず、ご来臨賜りまして誠に有り難うございます。

・記念式典の開始前に、集合したOSFのメンバー。（この他、数名が作業で他出中）



なお、帆走指導員にてOSF会友であられた、故・石原陽一氏は2013年6月に65歳の生涯を閉じられましたが、ご功績を讃え謹んでご冥福をお祈り致します。

あの時を振り返って

OSF会 (元・隊長)

安間 好昭

大田区海洋少年団 60 周年、その中で私の団活動を振り返って見ると、特に楽しめたのが団員と身近に触れ合う、三宅島キャンプの訓練でした。

往復の船旅、時には大波で揺れる船を、気にもせず寝入る団員、リーダー達とキャンプでの共同生活と訓練は、彼らにとって自然の中での初体験に目を輝かせ、ワクワクしながらキャンプ中の役割分担、やる事なす事の全てが新鮮で、何でも興味を持って接してくる事でした。

持参した米を薪火で飯盒炊飯、薪火で作った絶品料理？を食べ、昼間は海での水泳訓練、夜は満天の星の下でキャンプファイヤー、思い出に残る唄を歌った後は、砂浜に張ったテントで、布団無しで直かに寝る事に慣れない中でも、あっという間に寝ていく団員達の、寝顔を見るのが楽しみの一つでした。

ホッとする、一日の終わりで眠りに就くのが、自分にとって最高の時間を過ごせたのですが、噴火の為に今では砂浜が無くなってしまった、三宅島錆ヶ浜でのキャンプが懐かしく思われるこの頃です。



大田区団 60周年記念誌刊行に寄せて

OSF会 安藤 宗孝

「三丁目の夕日」という映画がありましたが、私自身もあの映画中の子役とほぼ近い時を過ごしてきました。

私が昭和43年（1968年）、小学5年生（10歳）で入団した当時は、現代みたいに食べる物も情報も、溢れるほど無く裕福ではありませんでしたが、人には優しい時代でした。

入団当時の大田区海洋少年団は、前年に15周年記念式典を終え一息ついた感があり、また山王（大森）隊が消滅するなど、団員が減少に向かう時期でした。

従って、海老取川でのカッター訓練は、交代要員が少ないことから漕ぐ時間も長くなり、手のマメが潰れお尻の皮も剥けても漕ぎ続け、必然的に鍛えられることになりました。

それが、今もこの年齢で沼津港や横浜港のカッターレースに、毎年懲りずに出場できているものと思います。

その他の思い出としては、全国大会への初参加が名古屋だったので、これも生まれて初めて新幹線に乗れたこと、その後も毎年の全国大会に参加していましたが、特に印象深いのは、高校生の時に参加した八戸大会が、一番思い出に残る大会でした。

夏のキャンプは、本栖湖や三宅島や御殿場や伊豆下田と楽しい思い出ばかりです。

また沖縄の本土返還前に、糸満海洋少年団との交流会に参加するためパスポートを作り、体験航海として全国から集った海洋少年団員と共に、神戸で結団式を行い25時間かけて那覇港に入港したことは今も忘れられません

そして年齢差はありますが、いつも一緒に行動していた先輩方・後輩とは苦楽を共にし同じ釜の飯を食べた仲間であり、兄弟同様かそれ以上の深いつながりができ、卒団者OBの集まりであるOSF会には違和感なく参加できました。

そのOSF会会長は、年齢を全く感じさせない剛腕且つ細心の気遣いで、老・中・壮年OB諸氏を見事にまとめあげ、会長自ら先陣きっての精力的な行動には、畏敬の念をもって只々ついて行くのみです。

このように、大田区海洋少年団は私の青春の1頁そのものであり、OSF会は今の私には人生の活力源であり宝物です。

今回、大田区海洋少年団は60周年となりましたが、兄と慕う先輩方も今年は還暦を迎えており、W還暦祝いに立ち会えたことは忘れえぬ記念の2013年となりました。

これからも、大田区海洋少年団とOSF会が共生し、次世代へのバトンタッチを確実にし、継続・発展し続けることを切に願って、一先ずここで筆を置きます。

少年海の歌

海はふるさと（旧・日本海洋少年団連盟歌）

1. 白波おどる 海よ海よ

海はたのしい みどりの広場
千鳥こい カモメこい
みんな来て 歌え
汽船も小船も 乗り出す潮だ
汽船も小船も 乗り出す潮だ（くり返し）

2. 越えゆく潮路 海よ海よ

父祖のあこがれ みどりの航路
北斗星 あおぎつつ
日本の 船で
七つの海洋 めざすは我等
七つの海洋 めざすは我等（くり返し）

3. うお飛ぶ庭よ 海よ海よ

夢もわき立つ みどりの広場
まぐろ追い 鯨追い
嵐を 越えて
日本の希望の かがやく腕だ
日本の希望の かがやく腕だ（くり返し）

☆ この歌は、昭和40年（頃）に現在の【みどりの広場】が、新たな日本連盟歌として制定される迄、長く連盟歌として歌われて来ました。

今でも、OSF会の集まりなどでは、団員時代の思い出話に併せて、懐かしい歌として愛唱されています。

編集後記

本誌は、結団60周年記念事業の一環として、既に行われました平成15年10月の、結団50周年以降の出来事を中心に編集しました。

昨年の9月頃より、早々にご寄稿を戴いたにも拘わらず、10月の記念式典等の準備やら整理などの他、仕事の合間に二股掛けたアレやコレで、やっと発刊に辿り着く迄に早や半年以上、誠に申し訳ない限りであります。

前回の「40歳のあゆみ」で、編集責任者をお受けした時は50代、今では何かをするのに、スピード感が無くなったのは歳のせいと、そこに逃げ場を求めるようになりました。

再び、60年誌の編集を仰せつかる破目となり、前回の轍を踏まないようにと意識したのですが、「担当する人間が同じでは根本的な解決は難しい」などと勝手に思いながらも、遅々として進まない編集に、我ながら懊悩する日々が続きました。

団のリーダーからは、たくさんの写真データを戴いたのですが、限りなくアナログ的な編集子にとって、CDのデータをパソコン画面で眺める責苦に、老眼の壁に加えて花粉症の追い打ちと、何事も発刊が遅くなった理由にこじ付けました。

なお、結団50周年記念誌が発刊されませんでしたので、その後10年間に相当する記録につきましては、記録写真並びに年表にてご覧戴きたく存じます。

何はともあれ、点眼しながら悪戦苦闘した結果を、誌面の端々から汲み取って戴ければ、編集者として最高の幸せです。

また、貴重な原稿をお寄せ戴いた皆様、そしてデータ・記録写真等を提供された皆様に、感謝申し上げますと共に、これからも様々な機会を捉えまして、大田区海洋少年団の確実な「あゆみ」をご支援賜りますよう、お願い申し上げます。

最後になりましたが、この結団60周年を共に迎える事なく、故人とられました団関係者の方々に、慎んで哀悼の意を表する次第であります。

平成26年5月 記

発行責任者	大田区海洋少年団
	団長 安藤 日出男
編集責任者	副団長 三渡 祥晃
題字	名誉団長 石井 信

発行所 (株)アルファ印刷

☎ (03) 5653-5528